

【行徳湿地の利用について】

1. 目標

地元住民や県民をはじめ、広く市民が、地域の自然を感じられる場所。自然を楽しむことができ、学べる場。そして多くの方々が大切な場所と認識していただくこと。

具体的な表現手法として、エコミュージアムとして機能することと考える。

- ・近年国内で減少が著しい淡水湿地から海域への移行域として表現（わかりやすいように工夫する）。
- ・県民が、様々なボランティア活動などの場として参画する。
- ・修学旅行、遠足の先として選定される。
- ・保護区内は地域を代表する多様な生物が生息し、その一部に市民が触れ合い親しむ。

2. 利用を図る上での特徴的な機能の現状と課題と施策（素案）

	特徴的な機能	現状	課題	目標達成のための施策
①	東京湾奥の自然（歴史を含む）を感じる場所	<ul style="list-style-type: none"> ・再生された湿地は日常の維持管理作業により、一定の水準で原風景として表現されている。 ・カワウやカイツブリなどの水鳥が繁殖し、渡りの時期にはシラサギ類や少数ながらシギ・チドリ類などが見られる。越冬期は、カモ類、数種類のタカ類が見られる。 ・他の生物についても、ウモレベンケイガニやベンケイガニ、トビハゼなどの希少種が生息するようになってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安定した淡水源がない。 ・維持管理作業に多大な労力が必要となっている。 ・淡水から海域への生物の移動経路は充分なのかなど、湿地や水路などの構造について検証されていない。 ・干潟の一部が消失し面積が少なくなっている。 ・海域に生物層が貧弱な深みがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・淡水源の確保。 ・限られた面積のなかで移行域としてのあり方を検討する。 ・効率のよい管理方法を見出す。 ・泥の移入。 ・深みの埋戻し。
②	景色を楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・園内については、観察会などにより自然を市民が感じることができる場は設定している。 ・周辺の丸浜川沿い、緑の国など、樹木を中心に緑地と水面が広がり憩いの場として機能している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園内観察会などの参加者が 10-30 人程度に留まっている。 ・周辺では、キョウチクトウやニセアカシアなどが多く、水辺と海岸緑地が造る景観を充分表現できていない。 ・植栽について地域住民とのコンセンサスが不十分。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園内観察会について、メニューを拡げ、さらにライトユーザー向けの設定を検討する。 ・当地の環境に適した植栽のあり方について検討が必要。
③	ボランティア活動の場	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月 1 回ボランティアデーを設定し、園内管理作業を主体に実施している。 ・これとは別に、自然発生したグループが湿地改善などを行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人手不足のため充分な対応ができていない。 ・参加者が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・メニュー作成、ボランティアの組織化、満足度の向上、効果的な告知などを行うコーディネーターの配置を検討する。
④	環境・体験学習の場	<ul style="list-style-type: none"> ・対象は、カニ、トビハゼ、昆虫、歴史など多彩に存在。 ・小学校低学年など年間数十校が施設には来場している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護区内に入り湿地環境を体感することまでできていない。 ・小学校高学年以上の年齢層が来場していないが、問合せは多いので潜在需要はあると感じている。 ・人手がなく対応できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境学習を積極的に行う。 ・インタープリターの配置を検討する。
⑤	環境再生の取組	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな労力をかけ開水面を維持するなど行い、少数ながら目標としている淡水性のシギ・チドリを誘致できている。 ・目論見通り水質浄化が図られており、良好な状態が維持されている。 ・2009 年に「関東水と緑の拠点ネットワーク 100 選（日本生態系協会）」に選定された。 	<ul style="list-style-type: none"> ・湿地の維持管理作業に多大な労力が必要となっている。 ・市民参加が広く行われていない。 ・保護区の環境再生について十分な理解が得られていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・効率のよい管理方法の模索。 ・手法と成果を発表する。 ・住民、県民をはじめ広く市民のご理解と協力を得られる仕組みをつくる。
⑥	科学的調査の場	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に鳥類調査は行われており所定の報告はなされている。 ・その他、個人の協力を得て植生、昆虫（鱗翅目、カマキリの卵のう）の調査や、大学による魚類や底生生物の調査が行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・記録がどうとられているのか整理されているのか不明。 ・多くの市民に伝えるような発表がされていない。 ・地域や市民との連携が見られない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護区の再生について、これまで行ってきた内容、手法と成果などについて論文として発表する。そのうえで、大学など各機関が行う科学的調査についてコーディネートし、広く市民に向けて告知する。 ・現在単発的に行われている行徳高校生物部との連携は可能と思われるので高めていく。
⑦	野鳥病院の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・年間 400 羽程度の鳥類を受入れ治療、放鳥などを行っている。 ・間近で野鳥が見られる→市民に随時説明している。 ・放鳥時にアナウンスし市民と一緒に実施→不定期。 ・傷病鳥の丸浜川での展示。 ・市民から病院へ餌やカンパをいただくという参加の場になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職場環境として衛生面で良好とはいえない。 ・限られた予算の中で、県民の収容依頼に適切に対応するため、苦慮している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職場環境として衛生面での改善を検討。 ・野鳥病院については、改めてあり方について議論する。目標、構造、位置、人材、機能、経費などの項目について検討する。
⑧	他の湾岸施設との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・情報、意見などの交換。スタッフ間の研修などについて、個人レベルで不定期な交流—他所のイベントへの参加などは行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他所との連携を組織的に行っていない。 ・交流することについて目的や成果が設定されていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流目的を検討し明確にしていく。 ・他所との連携や新たな参加を得ていく。